

卯田宗平著

『鵜飼いと現代中国——人と動物、国家のエスノグラフィ——』

東京大学出版会 2014年 x+367ページ

たどころきよし
田所聖志

I

本書は、中国の鵜飼い漁に焦点をあてて正面から論じた労作である。本書の副題は「人と動物、国家のエスノグラフィ」であり、そこに鵜飼いを通じて、人間と動物、国家の関係を読み解こうとする著者の意欲が表現されている。

本書では、文化人類学、民俗学、生態人類学を横断するアプローチが用いられている。すなわち、文化人類学や民俗学で用いられてきた聞き取り調査や文献調査、および労働時間や身体活動量などを計測する生態人類学的な定量調査を併用した手法である。著者は、これらの手法を用い、中国の魚食文化と政治体制の変化に目配りしながら、中国国内の鵜飼い漁の実態とその変化を体系的に説明した民族誌的研究を行った。本書は、著者が2005年から12年にかけて行った調査研究に基づく。

評者の専門は文化人類学でありオセアニアを対象とした研究を行ってきた。本書の生態人類学・文化人類学上の意義や特徴には次の3点があると評者には思われた。

- (1) 鵜飼い漁についての初めての民族誌的研究であり、かつ、家畜に焦点をあてた生業研究のなかに鵜飼い漁を位置づけることで、道具として動物を扱う生業形態研究の展開を切り開いた。
- (2) 人間と動物に焦点をあてる文化人類学の研究と接合する論点が見受けられる。
- (3) 生業活動の変化から中国の政治体制の変化の近代史を描いた研究である。

以下、次節で本書の構成を紹介し、第Ⅲ節より順次上記の意義と特徴について述べたい。

II

本書の構成は次のとおりである。

- 序章 生業としての鵜飼い
- 第1章 中国の鵜飼い漁とは何か
- 第2章 江西省鄱陽湖の鵜飼い漁
- 第3章 カワウを飼い慣らす技法
- 第4章 湖水面積が季節的に変動するなかで
- 第5章 漁場面積の減少が続くなかで
- 第6章 激動の中国現代史のなかで
- 終章 この現代中国を、カワウと生きぬく

本書では、序章で問題提起し、第1章では中国の鵜飼い漁の全体像が明らかにされる。そして第2章と第3章では、鄱陽湖での鵜飼い漁にみられる人間による鵜の管理の特徴が明らかにされる。さらに第4章と第5章では、鵜飼い漁の生業活動としての特徴が、漁場である湖の水位の季節変動や埋め立てによる漁場の縮小といった環境変化に対する漁師の対応から明らかにされる。第6章では、政治体制の変化に対する漁師の対応が説明される。そして終章では、本書で提示された事実から鵜飼い漁についての著者の見解が総括される。

III

1. 鵜飼い漁の民族誌

これまでも鵜飼い漁については断片的な研究があったが（たとえば可兒 [1966]）、特定の社会での実証的研究はなかった。本書では、人間による動物の利用と管理の様態に注目する生態人類学の手法を使った記述がなされている。第2章では、鵜飼い漁の実態が詳述され、続く第3章では、著者は鵜飼い漁師によるカワウの交配、繁殖、飼育の方法について詳述されている。これらの章で著者は、鵜飼い漁の実態と飼育化の様態についての詳細な描写に成功している。

第2章では、鵜飼い漁の実態が、漁師たちの構成や漁の手順、漁獲物、カワウの管理の仕方が詳細に描かれることにより明らかにされる。鵜飼い漁とは、

先行する船につけた20メートルほどの鉄線を水面下に下ろし、それを引きずりながら船が進むことによって、魚が驚いて逃げ回るところを、船の後をつけているカワウが捕らえるという漁法である(95～96ページ)。カワウよりも後方には鵜飼い漁師たちが乗り込む船があり、漁師たちは魚を飲み込んだカワウをタモ網で船に引き上げ、魚を吐き出させるという。先行する船が一艘であるか複数であるかによって、ダンガンとフォと呼ばれて区別されている(96ページ)。

第3章では、鵜飼い漁師たちによるカワウの繁殖技術とカワウの馴化の手法が説明されている。鵜飼い漁師たちはカワウの交配にあたって、メスを外部から調達するとともに、ヒナの水かきに母親の識別を示す切り込みを入れて目印とすることで、同じ母親から生まれたカワウ同士の交配をさけるなどの工夫をしていたという(152～153ページ)。交配の他にも、産卵、抱卵、孵化でも、鵜飼い漁師たちは細やかな働きかけを行っているという。また、飼育の際には、生後2カ月ほどのカワウを漁に慣れさせるためにまず船の止まり木に止まらせ、カワウが「自分の意思」で水面に飛び立つのを待つという工夫がなされている(169ページ)。

さらに著者は、船から飛び立ち、漁に参加し始めたカワウの活動範囲の変化を、デジタル距離測定計とデジタル方位計を使って12週間にわたって観察した(171～177ページ)。その結果として、若いカワウが徐々に船から遠い範囲に移動できるようになっていく過程を描き出すことに著者は成功した。そうして若いカワウは、船を追いかけるといった習性を獲得するという。カワウが「一人前に近い」状態になるまでの期間は、ディーゼルエンジンが導入された現在は3カ月ほどであるが、船外機の使われる以前はもっと短かった。現在はエンジンやスクリューの音があるため、以前より若いカワウが漁に慣れる時間が長くなっているという。

このような若いカワウの飼育と馴化の手法で著者が注目したのは、鵜飼い漁のなかで漁師たちがカワウたちを竹の棒で叩くという所作であった(178ページ)。著者がこの点に注目したのは、まだ漁師たちに慣れていない若いカワウを棒で叩いたら、カワウが逃げたか行ってしまうのではないかという疑問からであったという。著者は、観察とインタビ

ューの結果から、竹の棒で漁師たちが叩くのは、カワウの動きに介入するという目的を果たすために行われていることを明らかにした。漁師たちは「カワウは細くて長いものを怖がる」などと語るという(182ページ)。

こうした鵜飼い漁の研究を総括して、終章では、「リバランス」という概念を使って、鵜飼い漁の特徴を著者は考察している。リバランスとは、「家畜化と反家畜化(野生性の保持)のバランスを調整するという意味」であるという(297ページ)。鵜飼い漁が成立するためには、①カワウが人間に慣れ、②カワウが船を追うという習性を獲得し、かつその一方で、③カワウが本来の習性を保持するように人間が働きかける必要がある。これら3つは、家畜化と反家畜化という相反する特性を調整する働きかけであり、カワウに対するリバランスの過程と理解できるといえる。

さらに著者は、福井[1987]による分類、すなわち人間の動物利用には「狩猟対象」「生業対象」の2種類あるという分類の不備を指摘し、これらに加えて「生業手段」という別種の動物利用が存在するとした。著者によれば、この「生業手段」は、さらに「畜力利用」「野生性利用」の2つの類型に区別できるといえる(307ページ)。このように人間の動物利用を新たに体系化し、本書での詳述された鵜飼い漁を、「野生性利用」による「生業手段」としての動物の利用であると著者は位置づけている(309ページ)。

以上のような著者による鵜飼い漁の実態は、人間が動物をどのように管理し、利用しているのかに注目してきた生態人類学の視点を踏襲したものといえよう。評者の知るかぎりでは、これまで中国の鵜飼い漁の実態は断片的な記録しかなかった[可兒1966]。中国の鵜飼い漁の詳細な描写に成功したという点で、本書の学術上の意義は高いと思われる。生態人類学の議論の不備を指摘して本書で描かれた中国の鵜飼い漁の実践を位置づける考察を行ったという点でも、本書の論考は生態人類学の学術的展開に大きな貢献を果たしている。

2. 人間と動物に焦点をあてる研究との関連

本書を読む中で評者に感じられたのは、本書の論考には、人間と動物に焦点をあてる近年の文化人類

学の研究と接合する論点が含まれているということである。

近年の文化人類学では、人間と動物に焦点をあてる研究が活発となってきている [Knight 2005; 木村 2015a; 2015b]。こうした研究は、生態人類学に通底する人間による動物の管理とその方法の研究とは逆に、動物の側から人間への働きかけとそれに対する人間側の理解の側面を考慮した研究である。木村 [2015] は、人間と動物の関わりといったとき、「人間と動物との直接的な相互行為を扱うものと、人間と動物を同じ土俵に乗せて考えたときの『心』や『社会』という概念の見え方を扱う研究がある」と述べている。

こうした一連の研究の中で語られ、論じられているのは、いわば動物に「こころ」を見いだす人間による動物との情緒的な関係の結び方である。人間と動物との関係は、ただ、飼育する、狩る、食べるといった関係にとどまらない。動物は人間が愛情を注ぐ相手としても想定されている。

他方、本書で述べられた中国のカワウはどうか。著者は、第3章で述べられた「カワウへの介入」「カワウの貸し借り」を踏まえ、終章では、鵜飼い漁師とカワウとの情緒的なやり取りの有無について述べている。著者は、「カワウとの即物的ではない情緒的なかわりの有無を確かめるため、(中略)注意深く観察してきた」(287ページ)ものの、「漁師たちがカワウをかけがえのない特別な存在として認識しているような言説や行為を見ることはなかった。(中略)彼らはカワウを単なる生業の手段としてとらえており、彼らのカワウに対する態度はいつも“ドライ”であるようにみえた」という(287～288ページ)。そして、「カワウは漁師たちの内面的世界にまで深く影響を与えるような存在ではない」(288～289ページ)と述べている。

その理由についての著者の解釈は、「カワウを生業の手段として利用する鵜飼い漁において、漁師たちはむしろカワウに過剰に複雑な感情を持ち込まないほうがよい」からだというものである(289ページ)。通常15年生きるウ類に対して、W村のカワウの平均年齢は34歳であり、また、毎年平均185.6羽のカワウが補充され、頻繁に入れ替わっている(289～290ページ)。このため、漁師たちは、カワウと情緒的な関係を結ばず、生業の手段として

の枠組みを保持している。さらに、家畜化の進んだ一部の動物には、ネオテニー(幼形成熟)と呼ばれる生物学的な変化がみられる一方、カワウ漁とカワウの飼育では、カワウの野生性の保持が必要である。このため、漁師はカワウに対して生業の手段以上の特別な感情を抱きにくい、というのが著者の解釈である。

近年の文化人類学における人間と動物との関係の議論の中で論点となっているのは、人間による動物との愛情を介した情緒的なやり取りだけでなく、人間の側が動物に「こころ」を見いだしてしまう現象をどのように理解したらよいのだろうかという点である。

そのため、ニホンザルの観察を行う研究者によるサルとの相互行為が取り上げられたり [花村 2015]、チンパンジーによる他の動物の捕獲殺害と獲物を食べるという一連の動作を「狩猟」と捉える視点が再考されたりしている [島田 2015]。一方、オセアニア研究の分野でも、ニューギニア島における人間と家畜であるブタとの関係について、従来とは異なる解釈が出されている。これまでのニューギニア研究では、人間が家畜であるブタを大切に扱う「ブタ愛」(pig love)という現象は報告されてきたが、それはあくまでブタのもつ社会的に価値のある貴重な交換財という役割に基づいたものであると解釈されてきた。だが、近年、交換財としてのブタの役割が薄いニューギニア島のクボ人の間でも、飼い主は、家畜として飼っているブタに対し、手間暇をかけた世話を通じて強い愛情を注いでいることから、クボ人はブタと情緒的な関係を取り結んでいるのだとする解釈がなされている [Dwyer and Minnegal 2005]。

動物に「こころ」があるかどうかはともかく、「こころ」を見いだしてしまう人間側の考え方や行為を再考しようとする志向がこうした研究の流れのなかにはある。その点を考慮すると、本書で描かれた鵜飼い漁師とカワウとの関係は、単に「ドライにみえる」と解釈する以上に、深く豊かな考察が可能であるようにも評者には感じられた。漁師たちによる、水面を棒で叩くのは「カワウに漁の開始を告げるためである」といった語りや(178ページ)、「カワウは細くて長いものを怖がる」といった語り(182ページ)からは、漁師たちがカワウの思考にそって

漁の実践を理解している様子がかがえる。もちろん、それは漁師たちによるカワウの習性についての理解のあり方であって、「こころ」を見いだす行為ではないと考えることもできよう。だが、動物と人間との関係に関する研究の視点が文化人類学の分野で大きく転換している現在、考慮してもよい視角であるかもしれないと評者には感じられた。

3. 生業の変化から見る国家史

本書は、鵜飼い漁の変化と中国の統治体制の変動過程の対応関係を読み解く歴史研究と理解することもできる。生業についての実態研究から国家体制の変化に対する民衆の対応についての研究は、文化人類学で研究蓄積があり、生業研究のひとつの対象領域として確立されつつある。そうした研究の流れのなかに、本書を位置づけることができるだろう。

たとえば、高倉 [2000] は、シベリアの少数民族のトナカイ飼育の形態変化とソビエトからロシアへの政治形態の変化との対応関係を明らかにした。高倉が確認したように、「生業とは、狩猟・採集・漁撈・家畜飼養・農耕など個人によって行われる食料を確保／生産し生存を得るための活動と技術である。(中略) 重要なことは、生業の技術の体系はこれを実践する社会組織と密接な関連を持つ」[高倉 2012, 3]。だからこそ、特定の人びとの行う生業活動を明らかにしようとするとき、彼らの社会組織の形態との関連性を問う必要がある。

本書の第6章では、中国の政治体制の変化とそれに応じた鵜飼い漁師たちの対応を比較検討した(234～275ページ)。その結果、鵜飼い漁の技術は、時代ごとにそのときどきの政治支配形態に応じて変化してきた漁民の社会組織の形態と関連していることを、著者は丁寧な分析から明らかにした。このような分析結果は、高倉の研究と符合している。

著者によれば、鵜飼い漁師の対応の変化を1945年の新中国成立前から現在までたどると、次の4つの時期に区分できるという(235ページ)。

- ①漁師主導により秩序を維持する時代(1950年代初めまで)
- ②鵜飼い漁が組織化された時代(1970年代末まで)
- ③世帯による漁業経営が再開された時期(1990年代中頃まで)

④漁場面積の減少に対応する時代(1990年代中頃以降)

著者によれば、①の時期は漁師が自治組織を形成し、漁場などの漁をめぐる秩序を維持していた。当時は漁場をめぐる争いごとが多く、紛争の和解のために、漁師たちによる自治組織が機能していたという。当時行われていた、トオンやダーゴンと呼ばれた漁法は、市場の近場で行う漁に適していたため、よい漁場をめぐる争いが生まれやすかったという。

一方、上記の②にあたる新中国が成立したあとの1950年代から、生産単位の集団化が進められて人民公社である「愛国公社」が組織され、その下位の「漁業生産大隊」といった生産組織が形成された。これにより、それまでトオンと呼ばれる少数の漁師がほぼ単独世帯で行う漁法を主に行っていた漁師たちは、複数の世帯の漁師たちがひとつの単位となった漁を余儀なくされた。もともと一カ所にはりついて獲物を狙うトオンでは、複数の漁師の数に見合う獲物を得ることができないため、これに対応して、漁師たちは漁場を移動しながら漁を行うという対応をしたという。

また③の時期にあたる1980年代初頭に集団化政策が終わって人民公社が解体され、漁師たちはまた世帯ごとに分かれて漁を行うようになった(259ページ)。この時期からは、親子や兄弟、夫婦といった血縁や姻戚関係の漁師が集団となって漁を行うダンガンと呼ばれる漁が始められた。価格統制もなくなり、個人の自由な判断による操業が認められたため、ダンガンという漁法を漁師たちは選んだのである。

④の時期にあたる1990年中頃になると、「土地の使用権を世帯や企業に有償・期限付きで請け負わせ、その土地で自主裁量に基づいた生産活動ができる生産責任制」が始められた(265ページ)。生産責任制のもとでは、湖沼や河川の請負経営権を購入すれば、特定の場所を独占的に利用できる。そのため、この制度を利用して定置網や養殖業を始める業者が増えた。結果として、鵜飼い漁師たちが自由に漁を行える漁場の面積が減ってしまうことになった。さらに、この時期、干拓の造成によって陸地が広がったことも、その傾向を強めていた。

この時期から、漁師たちは、フォと呼ばれる「複数の人びとがある目的をもっておこなう活動」を意

味する漁を行うようになった。つまり、それまで親子や血縁といった紐帯に基づく単位で漁を行っていた鵜飼漁師たちは、そのときどきの状況に応じて一時的に形成される集団として漁撈集団を組むようになり、漁場面積の減少による漁を成功させることの難しさに対応したのである。

本書では、上記の内容が漁の形態の図解や詳細な記述によって説明されている。その内容は十分に説得力がある。それと同時に、評者には、④の時期のこのような漁師たちによる漁撈集団を改変させていく対応は、成員の範囲が固定されている団体的集団 (corporate group) であった漁撈集団を、アクション・グループ (action group) に変える対応であったと解釈できるのでないかと思われた。

また、無い物ねだりはよくないことであるが、共産主義のイデオロギー解釈の変遷という中国社会が経験した大きな思想のうねりと、漁法の形態変化との関連性をもし見いだすことができたとしたら、それはきわめてドラマチックで興味深い考察となったのではないかと評者には感じられた。

IV

本書では触れられていないが、近年、著者は、中国北部のエベンキ族でのトナカイの角売買の研究を始めており、畜獣とは異なる家畜を事例とした生業活動研究を進めていると聞く。さらに、ヨーロッパのマケドニアで現在でも鵜飼漁が行われていることを突き止め、現地に向いて鵜飼漁の観察を行ったという。本書の出版以後も、人間と動物の関係性を問い直す研究や、鵜飼漁の体系的な研究の双方からの研究を精力的に展開させている。今後も著者の研究展開から目を離すことができない。

文献リスト

〈日本語文献〉

可兒弘明 1966. 『鵜飼——よみがえる民俗と伝承——』
中央公論社.

木村大治 2015. 「はじめに——行為のもつれ——」 木村大治編『動物と出会う I ——出会いの相互行為——』ナカニシヤ出版.

——編 2015a. 『動物と出会う I ——出会いの相互行為——』ナカニシヤ出版.

——編 2015b. 『動物と出会う II ——心と社会の形成——』ナカニシヤ出版.

島田将喜 2015. 「人類の狩猟とチンパンジーの『狩猟——食う者と食われる者の間のインタラクション——」 木村大治編『動物と出会う I ——出会いの相互行為——』ナカニシヤ出版.

高倉浩樹 2000. 『社会主義の民族誌——シベリア・トナカイ飼育の風景——』東京都立大学出版会.

—— 2012. 『極北の牧畜民サハ——進化とマイクロ適応をめぐるシベリア民族誌——』昭和堂.

花村俊吉 2015. 「フィールドでサルと出遭い、その社会に巻き込まれる——観察という営みについての一考察——」 木村大治編『動物と出会う I ——出会いの相互行為——』ナカニシヤ出版.

福井勝義 1987. 「牧畜社会へのアプローチと課題」 福井勝義・谷泰編『牧畜文化の現像——生態・社会・歴史——』日本放送出版協会.

〈英語文献〉

Dwyer, P. D. and M. Minnegal 2005. "Person, Place or Pig: Animal Attachments and Human Transactions in New Guinea." in *Animals in Person: Cultural Perspectives on Human-Animal Intimacy*. ed. John Knight. New York: Berg Publishers.

Knight, John ed. 2005. *Animals in Person: Cultural Perspectives on Human-Animal Intimacy*. New York: Berg Publishers.

(秋田大学国際資源学部准教授)